

世界を変えるのは

前橋市立箱田中学校 三年

小池 陽菜乃

「まあ、外人だからね。」

確かに私は三カ国の混血だ。でも、こう言われるのは凄く辛かった。元々の肌が周りよりも黒いこと、髪の毛がひどい癖毛であることなどの容姿も、幼い頃から馬鹿にされてきた。私は三人兄弟だが、私の癖毛が一番強いため、「お兄ちゃんはサラサラなのに、ひなのはチリチリだね。」と比べられることもあった。泣きながら帰って、翌日は目を腫らしながら小学校に行くことも少なくなかった。中学生になってからも、私への差別的発言は変わらずあった。中学生になり、皆の知識が増えたことや、私が他人の言葉に敏感になったこともあり、冷たい言葉はより刺さるようになった。授業中に私が問題を間違えたり、失敗したりしたときに差別用語と共に嘲笑する声が聞こえたこともあった。私は周りの雰囲気にな

されて、本当は傷ついていることを言えなかった。そのせいで、私へ冷たい言葉をかける人は、言葉の重さに気づいていないのかもしれないと思った。もし、傷つけるつもりがなくて、あだ名のように差別用語を使っているのだとしても、私は許しがたい気持ちだった。

このような経験をしてきた中で、私は悲しくて辛いという感情と、なぜ馬鹿にされなくてはならないのかという怒りと疑問の感情に思い悩んでいた。でもいつだって支えてくれたのは母だった。混血の母は私の気持ちが痛いほど分かってと言ってくれた。いつも「ひなにしかない魅力が沢山あるから大丈夫！」と言いながら抱きしめてくれたのだ。どんな時も味方でいてくれて、私を勇気づけてくれた。また、混血の私を「かっこいい！」「羨ましい！」と言ってくれる友達もいた。特に嬉しかったのは、陸上の自主練習で出会った、他校の子の言葉だった。

「もしかして、外国の血とか入ってたりする？」私は「うん。」と頷いた。三カ国の混血だと伝えると、驚いた様子で

「三カ国も入っているなんてかっこいいね！」と言ってくれた。その後も、私が馬鹿にされてきた肌の色や、髪の色

毛の癖毛も、全て肯定してくれた。知り合って間もない私を、第一印象で決めつけずに肯定してくれたその子は、私に光を与えてくれた。たとえそれが本心でなかったとしても、その子の言葉は思いやりにあふれていたと思う。こうして私は、母や友達に数えきれないほど救われてきた。

血、肌、目、髪、毛の違いで世界中で差別を受けている人は、この時代でもなお、多いままだ。この社会問題を、私は身近で感じた。そこで、私のように傷つけられる人を減らしたいと思い、人種差別の事例や差別用語を調べるようになった。まず、私は知らないことで無意識に誰かを傷つけるのを避けたかった。世界各地で起きている人種差別は、歴史的な背景から根強く残っており、その事例は多岐にわたる。私が知った中では人種を理由に就職の機会が奪われる、教育や医療サービスが受けられない、政治的権利を得られない、暴力や殺害などがあった。どれも初めて知った時は、胸が張り裂けそうな気持ちになった。これらの事例のような人種差別を二度と起こさせないようにする第一歩として、知ることが重要だと思った。だからこの場を借りて、皆

さんにあまり知られていない差別用語を伝えたいと思う。「外人」と「ハーフ」は差別用語である。「外国人」と「混血」と言うのが適切だ。差別用語を知ることが、問題の解決の第一歩であると共に、発言してしまえば簡単に人を傷つけることもできる。そのため、差別用語を知った上で、その言葉を発さないことや発している人を止めるなどといった思いやりも必要になると私は考える。

私自身の境遇で辛い経験もあったが、そういう時に支えてくれた母や友達の言葉、自分で調べた世界の人種差別の現状から、多くのことを学んだ。そこから、皆さんに訴えたい。知識は最大の武器である。この武器は思いやりと共存することで多くの人を救う。しかし、思いやりが欠ければ、簡単に人を傷つける武器になる。だから皆さんには、知識と共に思いやりを持たなければならぬことを忘れないで欲しい。世界を変えるのは大きな力ではなく、知識と共に持つ小さな思いやりだ。